

Title	イギリスの水半球侵入
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1942
Jtitle	史学 Vol.20, No.3 (1942. 3) ,p.89(425)- 112(448)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19420300-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イギリスの水半球侵入

間崎万里

目次

- 一 序言
- 二 海洋帝國としてのイギリス
- 三 列強の水半球進出
- 四 イギリスの水半球侵入
- 五 結言

一 序言

昨今の太平洋はその名の如く穩かではなく、大きな動搖の一步前にあるかの如き氣配がする。それはどうしてであらうか。言ふまでもなく、イギリスの水半球への侵入とその制覇に起因するのである。幾分傾向的ではあるが、一般的知識によつて(一)その経路を跡付けることが、火急に執筆したる本文の目的である。

(一) 本文全體を通じて直接参照したる一般的著述は次の諸著であつて、その末尾に引用略語を括弧内に記し、その他は直接各項目

イギリスの水半球侵入(間崎)

(四三五)

八九

に註記するところとした。

- 1、田中萃一郎撰、東邦近世史二卷、岩波文庫版三卷上、中巻既刊(田中)
- 1、箕作元八著大類伸補訂、西洋史講話二卷(箕作)
- 1、海軍有終會編、太平洋二千六百年史(太平洋)
- 1、岡崎万里譯、ヴォルン民族文化史改訂版(ヴォルン)
- 1、J. R. Seeley, The Expansion of England, 1898. 加藤武司郎譯英國膨脹史論(シーレー)
- 1、Dean Inge, England, cheap ed., 1926. 小山英一譯英國論(インゲン)
- 1、Sir John A. R. Marriot, The Evolution of the British Empire and Commonwealth, 1939. (マリオット)
- 1、E. L. Woodward, The Age of Reform 1815—1870, 1938. (ウッドワード)
- 1、A Study Group of Members of the Royal Institute of International Affairs, The British Empire, 1937. (英帝國)
- 1、Ibid, Survey of British Commonwealth Affairs, Vol. I. Problems of Nationality 1918—1936, 1937. (ロイヤル・インスティテュート)
- 1、Ibid, Nationalism, 1937. (ナショナルイズム)
- 1、B. Williams, The British Empire (H. U. L. no. 136) (ウィリアムズ)
- 1、Cambridge History of the British Empire, Vol. VII, 1933. (キャンブリッジ)
- 1、Oxford Survey of the British Empire, Vols. V and VI, 1914. (オックスフォード)
- 1、J. Stoye, Das Britische Weltreich : sein Gefüge und seine Probleme, 1935. 2te. Aufl. 1937. (シュトイェ)
- 1、W. Pahl, Das politische Antlitz der Erde, 1940. 十葉翁譯世界政治地圖(パール)
- 1、M. Epstein, The Annual Register

二 海洋帝國としてのイギリス

我等が世界地圖を擴げ或は地球儀を廻はして、これを眺めてみると、我等の視線は自から我國の位置に落着くのである。この日本を中心に圓を描いて半球に達すると、その内側の西北面には大陸が、その外側の東南面には海洋が大きく開けてゐて、水陸略ぼ相半ばするのではないかと思はれる。これを『水陸半球』と名付けても敢へて不都合はなささうである。その陸地に沿うて防波堤の如くに斜に連つてゐる我國は海へ出るのにも陸へ進むのにも頗る便利であつて、よく均齊がとれ非常に恵まれた好位置にあることが判る。従つて文化の進んだ今日に於ては、東亞共榮圈のために將た世界平和のために、我國が大陸政策と海洋政策との兩面政策を併せて行ふことが、その宿命であるかの如くに感ぜられるのである。目下の戦争の終局はこのゲオポリチーク(一)即ち地政學の見解に何等かの解釋を與へて呉れるかも知れない。

(一) スエーデンのチエレインをその名祖とするこの學問は、地政學と譯してゐる人も少くないが、その我國への輸入と紹介に功績のあつた一部の人々により、地政治學といふ餘り語呂のよくない譯語が與へられてゐる。しかしこれは深く地政學と改めてほしいのである。日本語らしく地政學と言つたからとて、これが政治學の領域に屬するといふその人々の主張に反しはしないのである。

この我國の位置を西に移したかの如くに思はれるものは、英本國のある大英諸島である。私は假に我國に對して『水陸半球』といふ言葉を用ひて見たが、英國のためには夙に『陸半球』と『水半球』といふ言葉がある。それは、周知の如く、英本國を中心にして描いた半球が陸半球であつて、英國の對蹠點にある『南のブリテン』と言はれるニュー・ジールランドを中心にした半球が水半球である。さうして不思議の様ではあるが、我國の中等學校用の地圖には英國人のために工合のよいこの地圖が載つてゐる。(一) これも近くまで世界史上に制霸的地位を占めてゐたものが英國であつて見ればさして怪しむべきではなかつたかも知れない。兎に角、この水半球は水面が七分の六を占め、陸半球は陸地が等しく七分の六を占めてゐるさうである。(二)。

(一) 例へば三省堂編輯所編新制最近世界地圖 扉

(二) E. Huntington, *Environmental Basis of Social Geography*, 1929, P. 222.

この陸半球の中央を占めるグレート・ブリテンは我國と同じ様な島國である。この事實はその歴史を決定しその政策に對して基礎を與へたものである。今日の英國の外交政策の二重性はこの陸半球と水半球との關係に基く點が少くない。英國の政策が大陸に近い島國的位置によつて豫定せられ條件付けられてゐることは、百四十餘年前に、フィヒテが『封鎖的商業國家』(三)の中に説いたところであつて、『島國は、(特)に他の諸國がなほ未だその自然の國境をもたず、なほ未だそれ等の間に權力の均衡が問題となら

なかつた間は」本來獨立の一體ではなく、又斯様な確乎たる足を大陸に着けてゐたのであつて、島は單に屬地としてのみ認められてゐたこと、例へば大英諸島は本來フランスの本土に屬するものであることが、太古以來漠然と感ぜられてゐたのである。こゝには本土の支配者がその支配を島へ（伸長するか）或は一層有力なる島の支配者が大陸へ、その領土を擴張せんとするかの争のみがあつた。どちらも試みられた。フランスの諸君主はイギリスのそれを、又イギリスの諸王はフランスのそれを征服した……』と。

(一) J. G. Fichte, Der Geschlossene Handelsstaat, 1800.

フィヒテは既に權力の均衡を説き、世界貿易に於ける優越と植民制度を力説してゐるが、實にイギリスの外交政策は數百年來この Gleichgewichts-Politik を、否な寧ろ Politik des Kräfteausgleich であつた。當時この島國性は歐大陸に依從してゐる點から見て、他の政策を許さなかつたからである。これは島國が *divide et impera* 即ち大陸の諸國を離間して治める策をとり得る安全保障性をもつてゐるためである。

それでこれは多年の内訌を切り抜けたイギリスが、フアルツ相續戰役（一六八八—一六九七）、スペイン相續戰役（一七〇一—一七一三・四）、七年戰役（一七五六—一七六三）、フランス革命及びナポレオン戰役（一七九三—一八一五）などに順次參加して、他國の確執に乗じて、巧に自國の權勢の擴張を圖つて

來たのであつて、陸半球の中央にあるイギリスは當然大陸と多くの交渉をもつたのである。かく大陸に近い島國は本土から永久に切り放ち難い關係にある。さうしてその發展を遂げんがためには常に大陸と活潑なる接觸を維持しなければならぬ。かくしてその通商は島國の繁榮の基礎となるのであるが、他方大陸から常住領土慾に充ちた諸君主の羨望を起させず反覆侵入を導くことなきほどに遠ざかつてゐることが必要であつて、對岸は島國の急所と見られる。島國はこのために對岸を領有するか、それが不可能なれば本土の勢力を沿岸から遠ざけるように工夫し、海洋の自由を犯されぬやうに努めなくてはならぬ。直接海岸を得ることが出來ぬ場合には弱小國だけを對岸に發展させて置き、權力均衡をその外交の要諦となすべきである。それに失敗すれば大陸の敵國と同盟して他の危險なる敵を『大陸の劍』を以て抑壓すべきであつて、これが失敗すれば、島國は同盟か協商によつて、大陸のすべての國を合同させて、覇國たらんとする國に當らしむべきである。即ち同盟、補助金、經濟的手段(封鎖)を用ひてその目的の達成を圖るのである。これは上述の諸戰爭に於て古來イギリスが事實執り來つたところである。

島國は何れもその安全を環海にたのむ。海は最も明白なる國境であつて海上では大陸に多い境界の紛争は起らない。それで島國から見れば、本土は第二義的興味を有するに過ぎない。島國は海に近接せることのために、海洋の支配を得ようとし、帝國主義へ、世界支配へと導かれるのである。島國はその人民がこの共同の運命を一層速かにさとするので、速かに民族的統一を達し得る。斯様な國民は自然の命ず

る海外政策に自由行動を得んがために大陸の争闘から手を引き孤立に傾くのである。島國は『廣大なる地域を擁する、地球の涯にまで膨脹を強ひられる。それは島國の強ひられたる運命である』とはカール・シュプリングェンシュミットの言ふところである(一)。さうしてそれが廣く適用されるところは日本とイギリスの二國であるとは、以上の所説と共にストイエの説くところである(二)。

(一) Karl Springenschmidt, *Grossenmacht unter sich*, 1934, cited in Stoye.

(二) ストイエ、一―五頁

『一六〇三年にエリザベス女王が死んだ時、海外何れの陸地に於ても英國旗の下に生存せるイギリス人は一人も存しなかつた』(一)と言ふのに、今は何うであらう。『英王ジョージ六世は世界全陸地の四分の一を占め、五大陸に散布せる約五億萬人の上に君臨する主君である』(二)。我等はその發展振りに驚かざるを得ないのである。イギリスがかくも素晴らしい發展を遂げたのは四面環海の島國なるがためであつて、往時離間的作用をなしてゐた海は、技術の進歩と共に、次第に統一連絡的作用をなすに至つたからである。

(一) マリオット、六頁

海權の歴史に及ぼす影響と海國 (a Sea-Commonwealth) としての英帝國の歴史的な性格は、英本國に於て幾度も説かれたところであつて、一九〇七年の重要な英國の植民地會議に於て、トウイドマス卿も

イギリスの水半球侵入 (間崎)

(四三)

言つてゐる。『海は我々を結び合はすリンクである。それは諸國の興隆の理由であり、我等の第一の防禦であり、我等の大なる通商の起原である。……そこには一つの海があり、一つの帝國があり、一つの海軍がある』(一)と。今でこそ諺までもスペインから奪ひ取つて、その領土に日没を知らないほどの『英帝國』が七ツの海、特に水半球に於ける『海洋帝國』(an Oceanic Empire)である(二)ことに間違はないのであるが、斯様なイギリスの海外發展には先輩があつたのである。

(一) ハンコック、三六頁

(二) マリオット、六頁

最近四百年の世界史はヨーロッパ人が盛んに八方に進出した歴史であるが、その間ロシアが陸上に發展を求めたのに反し、ポルトガル、スペイン、オランダ、フランス、イギリス、ドイツなどは、順次海外に向つて領土の獲得を試みることとなつた。さうしてイギリスが太平洋に勢力を確立するに至つたのは比較的晩かつたのである(三)。

(三) それ等はヴォルフ、一八一頁以下に表記してある。

三 列強の水半球進出

大洋の彼方からカスチリヤの女王即ち後ちのスペインのために新大陸を求めてこれを發見し、さも得

意氣に『世界は小さし』⁽¹⁾ (Il mondo è poco.)と言ひ得たほどのコロンブスは、遂に我等の舞臺には出現しなかつた。コロンブスに次いで早くも世界の探検史上に登場して來たヴェニス國の人カボットはイギリスのためにアジヤへの西北航路を求めようとしたが、彼も未だ太平洋には達しないのであつた。バルボアといへども現今のバナマ地峽から彼が南の海と名附けた太平洋を覗いただけのことであつた。

(一) フルクハルト『イタリヤ・ルネサンスの文化』拙譯三一二頁、村松恒一郎、藤田健治譯岩波文庫版下巻一四頁

この近世初期に於ける所謂地理的探検及び發見⁽²⁾の時代に於て、太平洋が問題となり彼等が領土を獲得する様になつたのは、ヴァスコ・ダ・ガマのアフリカ東廻り印度航路や、マゼラン一行のヨーロッパから西廻り太平洋航路が發見せられてからのことであつて、海から東洋に這入つて來たのは、周知の如く、最初がポルトガルであり、次ぎがスペインであつた。『吾人の將來は海にあり』として、早くも遠洋航海に乗り出して來た葡人は、續々アフリカの南端を廻航して印度に達し、一五一〇年にアルブケルクがゴアを占領してからズンダ列島にも手を染め、スマトラからマラッカまでも占領し、かくて香料貿易の中心地は葡人の勢力圏に入り、我等の祖先も天文十二年なる一五四三年には種子島で彼等の鐵炮に接し、近世物質文化の曙を見たのである。斯様に葡人が主として東航して西から太平洋に出て來たのは、これが檀越にもその權利なきローマ法王によつて豫定分配せられたる、今日の言葉で言へば、彼等の勢力範圍だつたからである⁽³⁾。

(一) 小牧實繁、近世探検史(ラヂオ新書二二)は邦文でその大要を知るのによい。その他細井一六譯ハイウッド十七世紀十八世紀世界地理發見史にその後の部分が詳しい。英文で全般を面白く記してあるのは、Sir Perry Sykes, A History of Exploration from the Earliest Times to the Present Day, 1934. である。

(二) コロンブスの新地發見は葡西間に激争を生じたが、スペイン王の巧者な運動が效を奏して、彼はローマ法王アレクサンダー六世から一四九三年に三回に亙つて許しを得たのである。先づ五月三日にはキリスト教の布教を條件としてコロンブスによつて發見せられ、今後なほ發見せらるべき島と陸地は、それ等が他のキリスト教國の領有にあらざる限りその絶對的占有を、次いで特典を附與せられ、四日にはスペイン人とポルトガル人との活動範圍を、即ち今日の勢力範圍を分たれ、アゾール群島の西端から百スペインリーグに當るところに北極から南極に一線を畫し、この分界線の西と南に存する地をスペインに與へ、更に同年九月二十六日附を以て西方及び南方への印度航路による新發見地はすべてこれをスペインの領土とすることを許してゐたからで、翌一四九四年六月七日のトルデシラス條約により、この分界線は更に二百七十リーグ即ちヴェルデ岬から三百七十リーグ西方に移されたのである。Ludwig von Pastor, Geschichte der Päpste in Zeitalter der Renaissance, Bd. III, 1. S. 619ff.

それで、ポルトガル生れのマゼランがその王に對する不満からスペイン王の命を奉じて、世界周航の途に上り、スペインの豫定領分である西經三十度の線を超えて西航し、後日その名を以て呼ばれる海峡から彼が當時唱へた言葉 *Mare pacificum* (穏かな海) によつてその名を得たる太平洋(こ)へと這入つて來たことは當然の次第であつた。さうして逐次洋上の諸島を占領して一五二一年聖ラザルス(*St. Lazarus*)諸島、後にスペインの皇儲フィリップの名を以て今日の如く改名されるフィリップ諸島(*Las Filipinas*)

Philippines)に達し、マゼランの死後、その部下により出發時の五隻の中一隻の船がスペインに歸航して、世界周航の大事業は完成し(一五一九—二二)爾來大洋洲に於ける島嶼は續々發見せられることになつた。フィリッピン諸島がポルトガルの豫定領域の近くにスペインの領有となつたことは、最初の太平洋問題として又もや紛擾の種を蒔いたが、スペインはこれを押し切つて、太平洋は一時ポルトガルとスペインの領有するところであつた。

(一) 秋岡武次郎、太平洋の發見並に其の呼稱(世界地理第十卷濠洲・太平洋・南極、河出書房刊)に邦文の説明がある。

葡・西兩國の拓地植民に續いてオランダも世界の舞臺に乗出して太平洋に歩を運んだ。新教を奉ずるオランダは新教徒のエリザベス女王治下のイギリスの援助を得て、當時世界の覇國であつた舊教國のスペインの羈絆を脱し、イギリスはその無敵艦隊を撃破して海上を支配することになつた。かくて兩國は新興の勢を以て東洋經營のためにイギリスは一六〇〇年、オランダはその二年後に東印度會社を組織するに至つたが、當時ポルトガルはスペイン王の配下にあつて、リスボン港を閉鎖せられたので、オランダは仲繼貿易から轉じて印度への直取引を開始せんがためであつた。

かくてオランダは、スペインがイギリスに海上權を奪はれて植民地を保護する餘裕がなく、ポルトガルが多年の誅求と苛政のため土人の怨を買つてゐたのに乘じて、盛に東方經路を行なひ、ポルトガルの勢力を驅逐してこれに代り、一時世界の海洋に覇を稱した後ち、フランスとの戰爭に於て一七九五年以

來その屬國となり、一八一〇年にはそれに併合せられ、ポルトガルとスペインも亦たナポレオンに征服せられた。かくてフランス革命及びナポレオン時代は、舊植民地領有國家の一大決算期であつて、本國に於ける戦争と内亂のために、南米及び中米に於ける所謂『ラテン・アメリカ』の諸國は、北米に於ける英國植民地の叛亂の成功に鑑みて、續々獨立を遂げるに至り(一八一〇—一五)、オランダ及び葡・西の國勢の顛落と共に、西方からはイギリス、東方からはアメリカ合衆國が太平洋へ乗り出して來た。

それは今から百二三十年も前のことであるが、この時くらゐ全世界殊にアメリカに於ける權力關係の變動を生じたことはない。南米に九箇の共和國とブラジル帝國(一八八九年からは共和國)、及び中米に五箇の共和國とメキシコが獨立を遂げたのである。しかしそれ等は今までのところ太平洋の争覇戦には加はつてゐないが、北米合衆國はこの戦争中に俄然勢力を加へて強大なる國家となつた。合衆國は言はばヨーロッパに於ける革命及びナポレオン戦争の成金なのであつた。

一八二三年に、英の不干渉主義と呼應して、有名なモンロー教書によつて、北米大陸へのロシアの南下の勢と、王政を回復したヨーロッパ諸國の中・南米への干渉を排除することが出來たのは、その實力を示すものであつた。

爾來米國は種々の手段を用ひて一八四八年までに大體本土に於ける今日の尨大なる地域を得、南北戦争の後にはメキシコに干渉してナポレオン三世に手を退かせ、一八六七年にはロシアからアラスカとア

リューション列島を買収して東北から太平洋に乗り出して来た。

世界政策には聊か立ち後れの氣味であつた米國は、一八九三年には太平洋の中央に位置するハワイ王國の内亂に干渉して、一八九八年には遂にこれを併合し、キューバの獨立運動に加勢して米西戦争を開き、スペインからフィリピン諸島、マリアナ群島中のグアム島を得て（一八九八）、太平洋の西邊にまで進出して来た。米國が戦争中に占有してゐた他のスペイン領諸島を戦後返還したのに、右の二地を保留した理由は他日太平洋の覇を指すもの様であつた。

スペインは米國から返附された諸島を翌年ドイツに賣つて太平洋から手を退き、ドイツの世界政策はささやかながら太平洋に芽ぐんでゐたのに前大戰に敗退して、日本と濠洲及び新西蘭が委任統治の形式でそれに代はることになつた。

なほ米國は一八九六年に發見したウェーク島を一八九九年にその領土とし、翌年にはサモア群島の一部を領有し、かくて米國は太平洋を繞る海軍競争に有力なる地歩を占めることとなり、ハワイ群島中オアフ島には大金を投じて堅固なる大要塞を築き、その眞珠港は米國空海軍の中心基地であつて、米大陸のサン・フランシスコからミドウェー島、ウェーク島、グアム島、マニラ、香港に至る大太平洋横斷航空路に方り、英のシンガポールに對すると同様の關係にあつて、兩者の提携作戦が一步一步進みつゝ、あることは、我國にとつても實に容易ならざるものがある。我國が近く葡領チモール島に航空路を開始す

るに至つたことは將來の問題を豫示するものである。

(一) パール、原書二一三頁、邦譯二〇九頁、上掲世界地理第十卷四二二頁以下

米國は前述の如く消極的自衛策から轉じておくれて世界政策へ乗出して來たが、イギリスとても當初から明確なる方針を以て、世界政策に乗出して來た譯ではなかつた。ウトレヒト條約からウィーン條約に至る約一百年間(一七一四—一八一五)は世界の溫帶に於ける大部分の政治的主權を決定したものであるが、これは後から言はれることであつて、當時に於ては全く理解せられないのであつた(二)。

(二) ウッドワード、三五〇頁

七年戦争に於て、ヨーロッパ大陸でフレデリック大王がマリヤ・テレサと熱戦を演じてゐた間に、英佛の後援者達は別の舞臺で互に鎬を削り、海外の世界を争つたが、その結果は英國を利し、今日から見れば、共にその一小部分であるが、イギリスは、カナダと東印度に於て佛の植民地を得て大帝國の基礎を開き、所謂『第一帝國』を建設したのであるが、やがて北米の十三州を失つたところから、植民地は果實の如し、熟すれば落ちるものとして個人主義的マンチェスター派の勢力と共に、小英國論が旺盛であつた(三)。

(三) シーラー、原書五頁、邦譯二七頁

サー・エフ・ロジャース、後ものブラッチフォード卿の如きは一八五四年に『絶對的獨立でなければ

何を興へたところで移民は満足しないのだから、何人も期待してゐるらしいところの、結局仲よく袂別する仲間を作り上げるのにはどうしたらよいか好く分らぬといふことは甚だ残念である』といひ、後には印度帝國建設者となつたダズレーリ、後のビーコンスフィールド卿の如きですら、その前半生の自由黨時代にはこれ等の詰らぬ植民地は我等の首に巻つけた錘りであるときさへ語つたほどであつて、ジヨセフ・ヒュームも一八二三年の議會で植民地は國力に附加するところなく却てその脆弱さを増すと聲明したのでも分る通り、輿論は未だ世界政策をとるを欲しなかつたのである。

(一) ハンコック、一四頁、イング、原書一〇七頁以下、邦譯一三一頁以下、ウィリヤムス、二二〇—二二二頁

それ故ナポレオンの跡始末をしたウィーン公會に於ては、戰時中に占領してゐた植民地の大部分をフランスとオランダに返附し、主として軍事上の見地からアフリカのケープ植民地と印度のセイロン島、それにモーリシャス、デメララとエスキボ、トリニダード、聖ルシヤ及びトバゴの諸島を領有するに止め、後ちドイツと交換することになるヘリゴランド島をデンマークから、又地中海ではマルタ島やイオニヤ諸島を得たのであつた。

かくて英國が列強と競争の虞れある大陸政策を斷念し、當時摩擦の憂の少かつた海外の諸地に於て植民地を求め、陸半球から水半球へと乗り出して行つたことは、英國の將來の發展のために賢明だつたのである。もちろん、英國がアジヤに乗出して來たのはこの時に始まるものではないが、從來とり來つた

その海國政策はこゝにいよいよ本格的となり、爾來百二十餘年間の努力經營の結果、前述の如く素晴らしい大英帝國を建設するに至つたのである。

しかし『英國人にして英帝國の地圖を研究するならば、到る處にオランダから捲き上げた領土の名を見出して、良心の苛責に堪へられないだらう』(一)といふのは後のことであつて、イギリスの東洋發展は當初オランダの妨害を蒙つたのである。兩國は本國ではスペインを敵に廻して互に援助し合つたのに、植民地では互に角逐することになつた。

(一) イング、原書一〇三頁、邦譯一二六―七頁

今日ではゴムや錫や石油などの新時代の資源の寶庫である蘭印の地は當時ヨーロッパで珍重せられた香料の産地として狙はれたものであつて、イギリス人とても初にはやはりそれを目指したのであるが、英人はこの東印度諸島に於てはオランダ人の勢力が強くて敵することが出來ず、一六二三年にはモルツカ諸島から逐はれ、アンボイナ島では一日本人をスパイとして蘭人の要塞を窺はせたといふ嫌疑で數名の英人はこの邦人と共に虐殺せられたほどであつた(二)。翌年にはバタビヤからも逐はれ、英人はマラッカ海峡以東に於ては殆んど勢力を失つて仕舞つた。英人は爾來その方針を變更し、海から轉向して大陸の經營を始め、ポルトガルに代つて印度本土に着々發展を遂げることになつた。『國旗は商業に伴ふ』といふ有名な英國式侵略は、こゝでもその後種々の改組を見たる東印度會社の經營によつて大成功を收

めたのである。英人が印度に精力を集中するに至つたのは北米の十三州を失つてからその代地としての經營の歩武を進めたことによるのであるが、幾多の血腥い歴史と長歲月に亙る不撓不屈の努力の結果、十九世紀の初には半島の大部分を征服するに至つたのである。

(一) 箕作、五一八頁、太平洋、六八頁、一一五頁

東印度會社は一八一三年を以て印度貿易の獨占權を失ひ、その後廿年間は對支貿易の獨占を繼續することになつたので、その方針を一變した。この頃からしてイギリスの印度侵略は着々進行することとなつた。前述の如く對佛革命戰爭中に得たジャバやマラッカは一旦返還したが、後者を再び交換によつてペナンと共に領有することとなり(一八二四)、一八一九年に得たるシンガポールは一八三八年にペナンに代つて海峽植民地の首府とせられた。西はスエズ運河、ペリム、アデンに、東は香港(以前には威海衛まで)を連結し、且つ印度洋と太平洋の境界點を扼するシンガポールは、近年に於ける數次の要塞大増築工事と相俟つて、英國の東洋制覇の中心基地となしたのである(二)。

(一) パール、原書一八三頁、邦譯一七九頁

印度は一八七七年ヴィクトリヤ女王の治下に帝國を宣布せられ、爾來幾多の曲折を経て一九三五年の印度統治法の成立を見たが、未だ自治を欲する印度人の満足するところとはならず、今次の對獨戰爭と共に戦後の自治を公約されるに至つた(三)。老獪なるイギリスの事故、印度が果して自治領の地位に進む

べきか或は完全なる獨立を遂ぐべきかは今後に残された問題である。

(一) 昭和十五年八月八日發同盟電報、翌日の諸新聞。印度の歴史については外務省調査部監修印度民族史がある。

東印度はイギリスの大寶庫として最も重要な植民地であるので、英國は凡ゆる手段を講じてその防衛に當つてゐる。十九世紀の終末から二十世紀の初頭にかけて、イギリスがその西部及び北部の諸國、即ち今日のイラン國である當時のペルシヤ及びアフガニスタン、ベルチスタン、チベット等に干涉し、又その東方に於てフランスと競争してビルマを併合し、ロシヤに對抗するために『光榮ある孤立』をすて、我國と同盟を結んだのも、又一八四二年にボルネオの北部やマレー半島を奪つたのも、皆そのためであつた。しかしイギリスの太平洋経路は決して印度の保全のためのものではなかつた。太平洋にある英領には、綺羅星の如くに撒布してゐる諸島と共に、日本内地の約二十倍もあつて米國の本土と略ぼ等しい島狀大陸のオーストラリヤと、我が本州と九州を合せたよりも稍大きなニュー・ジールランドがあつて、そこに將來我國と大なる關係をもつべき大植民地が經營せられたのである。

四 イギリスの水半球侵入

オーストラリヤとニュー・ジールランドとは人口の乏しい未開地域であつたので、英人によるその領有は、長年に亘り血を以て彩られた印度経路の歴史とは異り、大體平和なる地理的發見と植民地經營の歴

史であつた。

イギリス人が初めて太平洋に來航したのは、ポルトガル人が我國へ漂着した天文十二年（一五四三）から三十四年後のことであつて、一五七七年にフランシス・ドレークの率ゐた船隊はマゼラン海峡を通過してこの海洋に立ち顯はれたのである。彼こそはその十一年後にスペインの無敵艦隊を撃破して英名を天下に轟かせた男であるが、彼は風浪のために、且つはペルトの寶物を狙つて南米大陸の西海岸を北上し、途中スペインの船隊を撃破して現在のサン・フランシスコ附近にまで達し、新英國（New Albion）の名の下にその一部を占領したが、彼はそれより轉じてフィリッピンに向ひ、喜望峰を廻つて一五八〇年に歸國した。ドレークが英人として最初の世界周航に成功して以來、イギリスの探検隊は續出し、一五八八年にも第二次世界周航を見たのであるが、ペルーの黄金に眼が眩み、南方大陸（Terra Australis）發見の計畫はエリザベス女王の末年まで放棄せられてゐた。その組織的探究は十八世紀末のことである（一〇）。

（一）ケンブリッジ、第七卷前篇二五—五三頁

もちろんその若干の部分は夙にスペイン人、ポルトガル人、特にオランダの海員によつて發見せられ或は見舞はれてゐる。前述の如く東印度諸島は多くオランダ人の勢力範圍に歸し、英人で初めて（一六〇〇）日本に來たウィリヤム・アダムス（三浦按針）の如きもオランダ船で漂着したのであり、以下述べ

る諸地が初めオランダ名を以て呼ばれたことも、オランダ人の當時の活躍を示すものである。オランダ人は一六〇六年にオーストラリア北部のカーペンタリヤ灣を發見してから續々發見を試みてゐるが、その中タスマンは一六四二年にその東南部を探查した。彼は當時その保護者であつた蘭印の總督の名を以てファン・デーメンズランドと呼ばれ、後ち一八五五年に流刑地の汚名を抹消せんがために改名して『島』であることは思はなかつた。島なることが分つたのは百五十年も後のことである。タスマンが大陸であると思つてゐたこの島には、現在は絶滅してゐるが當時なほ現代に於ける最も原始的な野蠻人が住み、裸體で石器を使用してゐた。タスマンは更にその東方の海上に島嶼を發見して『新西蘭』といふオランダ名を附した。商業主義のオランダ人はこの南の大陸を『新和蘭』と稱して發見の權利を主張したけれども、土人の住む貿易上無價値の地であるとしてこれを占有しようともしなかつた。それで後から來たクック大佐の三回に亙る探檢航海（一七六八―七九）によつて、これ等は遂に英人の有に歸したのである。

(一) 濠洲(發見)年代記、上掲世界地理第十卷九六七頁

(二) ケンプブリッジ、第七卷前篇二八九頁

(三) 間崎万里譯ブレストド古代文化史、五一―六頁

ジェームス・クックは最初の航海（一七六八―一七七二）に於てタヒチ島に於けるその主目的たる天

文觀測を遂げた後、西南に航してニュー・ジールランドを回航し、次いで東方から右の新和蘭、後の濠洲の東岸に達したが、その地は以前オランダ人の發見したる場所とは異なり、翠嵐滴る肥沃の地であつて、沿岸の植物が非常に異つてゐたので、即座に同行の科學班長バンクスに敬意を表してボタニー灣(Botany Bay)と命名し(一七七〇)、次いで天然の良港ポート・ジャクソンを發見した。彼はそれより北航して大小の海岸平野を認めて熱帯に入り、北端ヨーク岬に達し、一六〇五年最初に濠洲大陸の北端を見たるスペイン人トレスの名を以て呼ばれる海峡を通過して英本國に歸着したのである。クックは當時「ヨーロッパよりも大きい國』の東岸一帯の地をニュー・サウス・ウェールズと稱した。これは彼に英本國のプリストル水道の北側のウェールズ海岸を想起せしめたからである。彼はイギリスの國旗を掲げて英國王ジョージ三世のために占有を宣言したが、彼も英國も當時はこの發見に重きを置かなかつた。なほ暫く濠洲は『空き地』であつた。初めてこの地に移民が送られたのは十七年も後のことである。

全島に對してオーストラリヤといふ名稱が用ゐられたのは一八一四年に探檢家フリンダースの提唱に基き三年後に公稱として使用せられたのに始まるのであるが、これが『新和蘭』に代はる單一の名稱となるまでにはなほ相當の歳月を要したのである(二)。

(一) ウッドワード、三六八頁

オーストラリヤ植民地は二群に分たれる。オーストラリヤ群とニュー・ジールランド群とがこれである。

一九三五年に於ける濠洲の人口總數は約六百七十三萬五千人^(一)その大部分は英國人を祖先とするものであつて、土人は漸次消滅しつゝある。従つて人種的構成はほゞ單一であつて、言語も英語が優勢である。彼等は地域廣く人口稀薄であるにも拘らず、民族的個人主義のために人種の純潔と白人の生活標準の防衛を標榜して一九〇一年『白濠主義』^(二)の政策を採用して不法にも有色人種の入國を妨げてゐる。一八九六年までは自由に渡來することの出來た邦人も、今はマレー人、印度人、支那人と共にその制限を受けてゐる^(三)こゝに將來の危険が含まれてゐる。

(一) 英帝國、三八頁

(二) 同上、四七頁、ケンブリッジ、第七卷前篇四九九―五〇二頁

(三) 太平洋、七七一―六頁

濠洲の開拓は餘り芳しくない流刑地を以て始まつた。英國は長い間北米に罪囚を送つてゐたが、一七八三年にその地が失はれたので、自然その代地が必要になつた^(一)。當時テムズ河に繋留して居つた老朽船は一時的に罪囚の收容に宛てられたが、重罰主義の當時のことゝて忽ち超満員となり、その捌け口に窮してゐたところ、クックの第一次探檢に同行したマトラなるものの提言^(二)及びバンクスの上張によつて、ポタニー灣が氣候もよく白人の居住にも適し且つ遠隔の地でもあるので、格好の流刑地として選に上つた次第である。

- (一) オックスフォード、第六卷、五二一—一六四頁、E. Jenks, The History of the Australian Colonies, 1895.
(二) オックスフォード、第六卷一五三頁

かくて罪囚を乗せた最初の移民船は、農具、被服、糧食などを積み込んだ貨物船を伴つて、曾て七年戦争に参加したことがあるアーサー・フィリップ大佐に指揮せられて、一七八七年五月十三日英國南部のスピットヘッドを出帆し喜望岬を經由して一七八八年一月十八日ボタニー灣に到着した。フィリップは同灣を一巡した後この地を不適當であるとして一月二十六日北方の良港ポート・ジャクソンに到り、時の植民大臣シドニーの名を以て呼ばれる濠洲最初の居留地を建設し、ニュー・サウス・ウェルズを正式に英國植民地と布告したのである。

ジャクソン港に上陸した罪囚は七百七十七人の中、百八十八人が女子であつて、十八人の士官の下に百九十一人の水夫の監視を受けてゐた。第一代の總督フィリップはこの地が他國の手に落ちるのを防止するため、一千二百哩を距てたノーフォーク島の占領を命ぜられ、同島に兇惡なる囚徒の一部を移した。イギリスは前に二回までもフランスに刺戟せられて先占を試みた⁽¹⁾が、この度もフィリップがボタニー灣を出ようとする、一週間を出でない中に、二隻のフランス船が來航して『薪水』を得て行衛を晦ましたのである。實に『イギリスは六日で濠洲を手に入れた』⁽²⁾と言はれるのは、この好運を指すのである。フィリップは『この地はグレート・ブリテンの作つた最も價值ある領有物となるだらう』⁽³⁾と報告

してゐるが、漸次それは實現せられつゝある。

(一) ウッドワード、三六八頁

(二) イング、一〇四頁

(三) マリオット、一二五頁

餘りに長くなつたのでこの二自治領の經營についてはこれを略する。

五 結 言

海を制するものは世界を制する、隅田河口の水は古來テムズ河水に通じてゐる。ストイエを俟つまでもなくイギリスと共に海外發展を強ひられたる島國としての日本である。水半球へはイギリスよりも遙かに近距離にある我國が今後イギリスに代つて水半球に覇を稱するのは、蓋し當然の運命であらうと思はれる。しかし未來は歴史の外にある。その成否は偏に我が民族の努力如何に係はつてゐる。

(昭和一六、一一、一一)

追記 本文は大東亞戦争の開始以前に書かれたものであるが、印刷の後れたためにその儘刊行することとなつた。請ふ諒せられよ。(筆者)